

防災歳時記 (56)

—昇龍、江戸の町を襲う—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

茶わん大のひょうが降ってきた

江戸時代の人々は地震・噴火・洪水だけでなく、空から降ってくる氷の塊(ひょう)や落雷にも恐れおののいた。

文政13年閏3月29日(西暦1830年5月21日)、江戸の町で雷を伴ったひょうが降った。尾張藩士で書家の三好想山(P-1850)が著し、嘉永3年(1850)に刊行された奇談珍話集「想山著聞奇集」(国立公文書館蔵)に、このときのひょうや被害が細かく記されている。同書などを参考にすると降ひょうなどの状況はこうだ。

3月29日正午すぎから、市ヶ谷の北西方で真っ黒な雲がむらむらとわき上がった。一天にわかにかき曇ると、またたく間にもすごい雷鳴を伴った暴風が巻き上がり、風向が南から西に変わった。雨に混じって小石のようなひょうが地面を音高くたたいた。わずか1、2時間で止んだが、家々の杉皮屋根は打ち抜かれ、戸外にいた人々は傷つき、畑の作物は全滅し、その惨状は見るに忍びなかった。

ひょうの大きさは、江戸城本丸・市ヶ谷・大久保・四谷・赤坂などでは大豆大、小石川・

白山辺りではこぶし大、小日向ではそら豆大、さらに上野の山付近ではみかん・たどん・茶わん大など大小さまざまであった。また、深川では無患子(果実は径約27センチ)ほどの大きさで、品川辺りではほとんどひょうらしきものは降らなかった。

ひょうの形は梅の花、牡丹の花から、大きいもので子供や獅子の頭までいろいろだった。

ひょうの重さは、板橋宿では170~180匁(約650グラム)。本郷丸山の福山藩邸(中屋敷)に降ったひょうは重さ220匁(約835グラム)で、同藩邸の婦人は衣類の上から二の腕(肩とひじとの間の部分)を直撃され負傷した。駒込富士前などでは83人が頭にけがをし、足を打たれた下男が歩けなくなった。

また、下谷の辺りではひょうが特に大きく、目方20~30匁(約114グラム)ともある(武江年表、1849)。

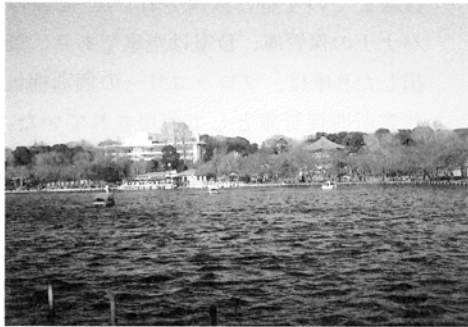
ひょうを降らせた雷雲は、江戸の町の西方に現れ、市ヶ谷・本郷・上野・浅草付近を経て東進し、行徳・船橋方面でも大暴れした。

空から魚が降ってきた

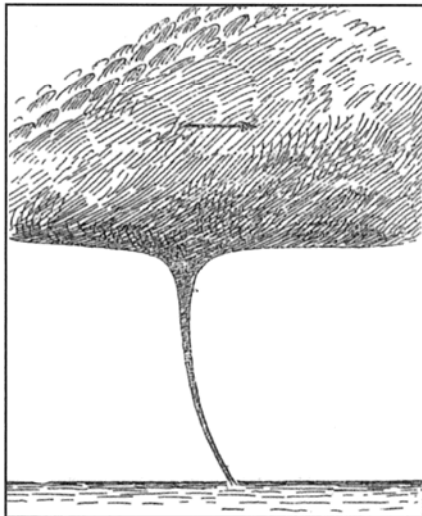
この日、上野・不忍池では、池一面に黒雲がわき上がり、昇龍(竜巻)が発生した。

昇龍は、池の魚を大空に吸い上げ、近くの町に降らせた。湯島の切り通しでは尺余の鯉が、小石川の仲町付近では鮒・どじょうが多く降ってきたとかさまざまな風説がささやかれた。

竜巻によって魚などが空から降ってくる



不忍池 (東京・上野)



竜巻 (岡田気象学から)

話はよく聞く。

1898年5月16日、オーストラリアのニューサウスウェールズ州東岸のイーデンで観測された竜巻は高さ1,528mもあった。

この付近の竜巻は海から魚を吸い上げ、近くの町で落すことで知られる(ギネスワールドレコード、2002)。

また、1930年8月14日、イタリアのナポリの市場を襲った竜巻は、空から果物の雨を降らせた。いずれも竜巻中心部の低い気圧が魚や果物を上空に吸い上げた。

治承4年4月29日(1180年5月25日)午後2時ごろ、京都・中御門京極付近で大きな辻風が起こり、六条辺りまで吹き抜けた。雷が鳴り、ひょうが降り、多数の家屋が倒壊し、雲中に門戸・車などの雑物を吹き上げたので京の人は大騒ぎとなった。昔は、竜巻を「辻風」「廻瓢(つむじ風)」「旋風」「昇龍」などと言った。

昇龍とは、まことに「言い得て妙」で、天に昇る竜を想像させる。アフリカの一部の原住民は、21世紀の現代でも竜巻を蛇だと信じているそうだ。真っ黒な積乱雲の底から垂れ下がる漏斗状の雲が蛇や竜に見えるのも無理はない。

初夏の5~6月はひょうの季節である。2008年は青森県で、リンゴが過去最悪のひょう害を受け、被害額は104億円に達したという。

2006年秋には宮崎県延岡市、北海道佐呂間町で竜巻のため合わせて12人の方が亡くなった。気象庁は2008年3月から「竜巻注意情報」の発表を開始した。

ひょうや竜巻の被害を少しでも減らす道には終わりはない。